

第三章 「帝国」：「異なる」ものへの視座

— イリミンスキー、ピウスツキ、ザメンホフ —

はじめに 帝国としての発展

16 世紀以来、ロシアは東方へ進出し、帝国へ様々な地域とそこに居住する人々を統合し、20 世紀初めには多様な異域を包摂し編成する帝国となり、国際政治では大英帝国と対峙し、グレートゲームを繰り広げるようになった。この帝国は、正教の中央部とその西方に広がるカトリック圏、バルト地方を介してプロテスタントの文化圏に通じ、東方にはイスラムや仏教、さらに土俗的な民族信仰と文化の地域を包摂し、まさに多様な地域を編成支配したのである。

まず、西方のキリスト教文化圏とともに、ロシアは東方に向かって、第一にイスラム世界を支配に組み入れた。ヴォルガ・ウラル地域のタタール人やバシキール人から、シベリアの南に広がるカザフの草原、そしてコーカサスから中央アジアに及ぶ地域である。広大なイスラム文化圏が、ロシアの帝国としての支配下にはいった。さらに、「帝国」の支配には、シベリアから太平洋沿岸の半島や列島、島嶼に居住する狩猟・漁労・採集、牧畜(トナカイ)などを生業とする北方の少数先住民社会が服した。この支配は、19 世紀の前半には新大陸のアラスカからカリフォルニア沖まで及んだ。第三に、中華帝国の周縁からユーラシアのステップに食い込むブリヤート人やカルムイク人のモンゴル系牧民とラマ教文化の地域である。

この東方への拡大は、1552 年 10 月のカザン汗国滅亡と、それに続く 1582 年のシビル汗国の敗退で大きな弾みを得て、一挙にウラルを越えてシベリア、太平洋岸へ達した。大航海時代のもう一つの世界の拡大であった。ここでは、臣従の誓いとヤサークの徴収がなされ、そこに住む人々はロシアの統治へ編成され正教へ包摂され、その改宗が進められた。

16～17 世紀には、ヴォルガ中流域での正教への改宗は、この地域の文化的拠点であったカザンの都市改造とともに進められた。市中心の丘はクレムリンに改造され、ハン国のスュム＝ビケの塔は残ったが宮殿と正教会寺院に改造され、タタール人は市街地から郊外へ排除された。これは、ヨーロッパ大陸の西端イベリア半島でレコンキスタ以来進められた、イスラムやユダヤ教に対する改宗と審問、都市の改造にパラレルな歴史状況であった。

ピョートル大帝のもとで、ロシアは北方戦争に勝利し、ヨーロッパの大国として、1721 年 10 月には、彼は「イムペラトル」と称揚され、その国は「帝国」の名を冠したのである。帝国への統合の力は、彼のもとで強く働いた。シベリアの先住民に対し、1714 年 12 月 6 日付けの勅令で、次のように強制的な改宗が命じられている。

ヴォグール[西シベリアのマンシィ]、オスチャーキ [ハントウイ、セリクーブの旧称]、タタール、ツングース[現在のエヴェンキ]、ヤクートの居住する処では、彼らの偶像および不浄なる礼拝所が見いだされれば、焼き払い、彼ら異域の

ものを全てキリストの信仰に改宗させよ。改宗した者には、ツァーリからの賜物として麻布、ルバシユカ[上衣]を与え、ヤサークで特別の扱いをなせ。

初めてコーランのロシア語訳がなされたのは、その二年後の 1716 年で、1722 年には帝国でイスラム研究の本も出された。イスラムの研究と同時に、その寺院メチェチィの建造は制限され規制された。イスラムから正教への改宗は、ロシアに服属したタタール人を中心に進められてきたのだが、アンナ女帝のもとで、1738 年には、イスラムに再び帰教した人物がウラルのエカチェリンプルグで火刑に処される事件が起きている。18 世紀の 40 年代から 50 年代にかけては、特別な改宗庁が設置され、強制的な正教への改宗が進められたのだが、この強制的な改宗政策は、エカテリーナ二世の「啓蒙」の帝国のもとで「寛容」へと大きく転換している。1767 年の法典編纂委員会への「訓令」で、女帝はイスラムへの制限の撤廃をのべ、彼女の「寛容」政策は、1773 年のイスラム宗務庁の設置に体现された。

これは、ピョートル大帝が正教会の監督のために設置した宗務院と同じく、イスラムに対する帝国の監督機関であった。ロシアでも「啓蒙」と、そこでの信仰の「寛容」が目指され、その体系が作り出されていった。だが、19 世紀半ばには、西欧の列強の全てを相手としたクリミア戦争で、その敗北をうけて「大改革」の時代が到来すると、帝国はカトリック系ポーランドの反乱とタタール人の「棄教」の波に襲われることになったのである。

「大改革」を迎えたロシア、そして南北戦争をへて合衆国の統一をめざすアメリカ、さらにプロイセンによるドイツの統一、オーストリーの改革と二重帝国、イタリアのリソルジメントと、この時代は「国家」の統一と再編に向かう時代であるが、明治日本も「開国」を経て、国家への統合という近代のこの要請に直面したのである。

さて、付表の【帝国人口の民族構成】から、その近代への歩みで、ロシアがおかれた困難が窺われる。ロシアでは、帝国への歴史的拡大と発展は、その統合への危機を孕みつつ進行していたのである。つまり、1719 年の時点で、ロシアの総人口は 1,573 万 6 千人だが、二百年をへて第一次大戦のなかでは、帝国人口は 1 億 7,214 万 6 千で、臣民の数は 10.9 倍、ほぼ 11 倍に増大したのだが、ロシア人の比率は 70.7%から 44.6%に低下していたのである。体制が独自の民族と認めず、大ロシア人に含められたウクライナ人と白ロシア人を合わせても 66.7%であり、帝国人口の三分の二である。これに対し、カトリック系ポーランド人は 6.5%で、ユダヤ人は 4.2%、プロテスタント系フィン人は 1.6%である。ドイツ系は、バルト地方の貴族と都市住民、ウクライナやヴォルガ中流域の入植農民を中心に 244 万 8 千で、1.4%をなしていた。

他方で、イスラム系のタタール人とバシキール人は合わせて 2.8%である。その他、民族と信仰の多様性は歴然としており、これは、まさに「帝国」の偉容でもある。だが、非ロシア系で西方ヨーロッパとも結びつく諸民族が帝国の西部に居住し、南部、コーカサス、中央アジア、シベリア・極東と、東方系の諸民族が無視できない多数をそれぞれの地域でなしており、この状況は帝国の地域的統合への潜在的な脅威であった。二つの付表は、1897 年の帝国人口調査に基づき、帝国の各地域で非ロシア系の人々が民族と信仰で大きな部分

をなしており、ロシア中央と多様な辺域を包摂する帝国の中核＝周縁構造を示している。

帝政ロシアは、その統合に向けて、軍事力のみならず、正教会とロシア語、そして教育など文化の分野において、また身分制や税制など社会的装置を通じて、帝国への統合という難題に対処せねばならなかった。

表 1-2 帝国人口の民族構成 (1719—1914/17)

民族*	年度	1719 年		1914/17 年	
		人口(千人)	%	人口(千人)	%
ロシア人		11,127	70.7	76,672	44.6
ウクライナ人		2,026	12.9	31,023	18.1
白ロシア人		383	2.4	6,768	4.0
ポーランド人		—	—	11,208	6.5
リトアニア人		—	—	1,786	1
ラトヴィア人		162	1.0	1,635	1
モルダヴィア人(ベッサラビア)		—	—	1,216	0.7
ユダヤ人		—	—	7,253	4.2
ドイツ人		31	0.2	2,448	1.4
タジク人		—	—	488	0.3
オセッタン		—	—	237	0.1
アルメニア人		—	—	1,989	1.2
ギリシヤ人		—	—	261	0.2
グルジア人		—	—	1,748	1.0
カバルディア人		—	—	103	0.06
チェルケス人		—	—	59	0.03
チュチェン人		—	—	253	0.1
ダゲスタンの諸族		—	—	772	0.5
フィン人		164	1.0	2,697	1.6
ウドムルト人		48	0.3	535	0.3
エストニア人		309	1.9	1,154	0.6
モルドヴァ人(沿ヴォルガ)		107	0.7	1,188	0.7
タタール人		293	1.9	3,010	1.8
バシキール人		172	1.1	1,733	1.0
チュヴァシ人		218	1.4	1,124	0.6
アゼリー人		—	—	1,996	1.2
ノガイ人		114	0.7	57	0.05
トルクメン人		—	—	361	0.2
カザフ人		—	—	4,698	2.7
キルギス人		—	—	737	0.4
ウズベク人		—	—	1,964	1.2
ヤクート人		35	0.2	227	0.1
カルムイク人		200	1.3	169	0.1
ブリヤート人		48	0.3	279	0.2
その他		301	2.0	3,902	2.26

注*) 民族は言語に基づいて分類されている。

典拠) С. И. Брук, В. М. Кабузан, Этнический состав населения России (1709-1917 гг.). «Советская Этнография», 1980, No. 6 сс. 24-25.

典拠: 西山克典『ロシア革命と東方辺境地域』北大図書刊行会、2002 年、32 頁

ロシア帝国のそれぞれの地域における民族と信仰別の住民構成は、以下の表に示される。

ロシア人は、ヨーロッパ部とシベリア・極東で 8 割を超え多数をなすが、他の辺域ではカフカースで 3 割をしめ相対多数であるが、他では 10%にも満たない。信仰では、カトリックがポーランドで、プロテスタントがフィンランドで、そしてイスラムは中央アジアで圧倒的である。

地域 \ 宗教	正教徒	イスラム教徒	カトリック	プロテスタント	ユダヤ教徒	他のキリスト教徒	他の非キリスト教徒
ヨーロッパ・ロシア	83.58	3.82	4.65	3.30	4.07	0.24	0.34 ¹⁾
ポーランド	7.16	0.05	74.32	4.46	14.01	0.00	0.00
フィンランド	1.90	—	—	98.00	—	0.10	—
カフカース	50.94	34.53	0.47	0.61	0.63	12.49	0.32
シベリア・極東	89.97	2.20	0.60	0.28	0.60	0.01	6.34 ²⁾
中央アジア	9.18	90.29	0.17	0.12	0.16	0.03	0.02
帝国全体	69.90	10.83	8.91 [*]	4.85	4.05	0.96	0.50 ³⁾

注) 1) うち 0.18%は仏教ラマ信徒, 2) うち 4.3%が仏教ラマ信徒, 3) うち 0.3%が仏教ラマ信徒。

典拠) «Статистический ежегодник России. 1912 г.» Спб., 1913, сс. 70-71.

地域 \ 民族	ロシア人	チュルク・タタール系	ポーランド人	フィン系	ユダヤ人	リトアニア人	ドイツ人	グルジア人	カフカース山民	アルメニア人	モンゴル系	他
ヨーロッパ・ロシア	80.0	4.9	1.2	3.6	4.0	3.0	1.4	—	—	0.1	0.2	1.6 ¹⁾
ポーランド	6.7	0.1	71.8	0.1	13.5	3.3	4.3	—	—	—	—	0.2
フィンランド	0.2	—	—	86.7	—	—	13.0	—	—	—	—	0.1
カフカース	34.2	20.2	0.3	0.1	0.4	0.1	0.6	14.5	11.7	12.0	0.2	5.9 ²⁾
シベリア・極東	81.0	8.3	0.5	1.1	0.5	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	6.2	2.1 ³⁾
中央アジア	8.9	85.5	0.1	0.2	0.1	0.0	0.1	—	0.1	0.1	0.2	4.8 ⁴⁾
帝国全体	65.5	10.6	6.2	4.5	3.9	2.4	1.6	1.1	0.9	0.9	0.4	2.0 ⁵⁾

注) 1) このうち 1.2%がモルダヴィア人とルーマニア人, 2) うち 1.8%がオセッソ人, 1.1%がクルド人, 1.1%がギリシヤ人, 1.0%がタート人, 3) うち 1.2%がトゥングース系, 4) うち 4.5%がタジク人, 5) うち 0.9%がモルダヴィア人とルーマニア人。

典拠) «Статистический ежегодник России. 1912 г.» Спб., 1913, сс. 64-65.

典拠：同書、34、39 頁

第一節 イリミンスキー・システムの形成

19 世紀の前半に、帝国に於いてイスラム系住民の居住するヴォルガ中流域では、すでに「棄教」の波に間歇的に襲われていた。「棄教 отпадение」とは、一般的には信仰を棄てることであるが、ロシア史の文脈では正教会をはなれイスラムへと復帰することを意味する。帝国では正教への改宗は推奨され、あるいは半ば強制され、納税や徴兵で便宜が図られ、改宗に際し織布などの報償がなされてきたが、正教から他の宗派への改宗は「寛容」の体系のもとでも禁圧されていた。洗礼を受け改宗したものは、形式的には正教徒として登録されるが、実質はムスリムの生活を受け継いできたものもいた。この生活の「二重性」は、

誕生から結婚や死亡にいたる個人の生活と社会のいたる局面で現われ、その抑圧に抗して「静かな反乱」が生まれていた。この「棄教」の中心は、正教会の受洗をへたタタール人であり、彼らのイスラムへの帰教と、それがこのヴォルガ・ウラル地域の他の民族へ及ぼす影響が何よりも懸念された。「棄教」の波は、1825年のデカブリストの乱以降やクリミア戦争の敗北をへた1866年に、そしてロシアに「革命」が姿を現した1905年以降に、間歇的にこの地域をとらえたのである。

ニコライ・イヴァノヴィチ・イリミンスキー



この1866年の「棄教」が渦巻く状況のなかで、正教神学者、ニコライ・イリミンスキー(1822-1891)は異民族の正教信仰のありかたを問い直したのである。彼の経歴をたどると、1846年にカザンの正教アカデミーを修了し、アラビア・タタール語の教授に任命され、翌年からは、カザン市郊外のタタール人街に移転し生活している。1851年7月からは、三か年の中東への研修調査に赴くが、それは、西欧諸国のイスラム対策の調査と正教の宣教を目的としていた。フランス支配下のアルジェリアやイギリス統治下のインドでの宗教政策を調べるが、彼の関心は原住民が「心から回心」し改宗することであり、その「回心」がなされなければ、正教を離れて「棄教」や「帰教」がたえず起こると考え、イスラムという信仰に対しても内在的にとらえ対応する立場を取った。このような姿勢は、イスラムの宣伝に通じると、カザンの聖職者たちの疑惑と反感をよぶことになった。1858年の9月から1861年末まで、彼はカザンを離れ、南方のオレンブルグで通訳官として勤務する。そして、1861年12月から1872年まで、カザン大学でチュルク・タタール語講座特任教授として復帰し、同時にカザン神学アカデミーでも教えることになった。この60年代の「大改革」の時代に、彼がカザンに受洗タタール人学校を開校するのは、1864年であり、1872年には、その学校の教師養成のためにさらにカザン・タタール師範学校の開校にこぎつける。正教会の新しい宣教を、新しい教育のシステムに基づいて始めるのである。

カザン県では、大量の「棄教」の動きが生じる事態のなかで、イリミンスキーは正教への改宗が「内面の回心なく」外的な強制で進められたことへの反省から、新しい教育システムの形成に向かったのである。まず「母語」に依り、それを用いた信仰への回心であり、キリール文字で彼らの口語を母語として文語を形成すること、そしてその文字を用いて教科書を作成し、正教教育を実施することであった。

タタール人をはじめ正教への改宗者に対し、アラビア文字による文語にかえて初等教育における彼らの「母語」を重視する立場は、母乳で子を育てる女性の教育における役割の

重要性の認識という、当時の教育界での主張にも通じるものであるが、何よりもアラビア文字とそのイスラム文献から改宗者を引き離し、イスラム文化から遮断し、キリール文字により彼ら改宗者の口語を「母語」として用い、新しい文語を創り出し、それによって棄教を防ぎ、イスラムへ対抗しようとしたのである。

1860年代に、イリミンスキーの非ロシア系の人々に向けた「母語」とキリール文字にもとづく正教教育の体系が成立し、この方式は1870年の文部省「異族人教育規則」のなかで、非ロシア系異族人に初等学校で「母語」での教育をおこなうことが認知された。こうして、非ロシア系の異民族の帝国への統合は、教育と信仰の分野に於いて、ヴォルガ中流・ウラル地域で受洗タタール人（クリャシェン）からチュヴァシ、マリ、ウドムルト、バシキール人などチュルク系やフィン系の児童に対し学校の開設と、さらにその教師養成のための異族人師範学校の開設へと発展していった。そして、異族人のなかから教師と聖職者を中心に彼らの民族知識人が形成されていく。この方向は、国家語としてロシア語を彼らに直接、実物教授法で導入する方向と対抗していくことになる。

イリミンスキーのこの方式は、ロシア正教会がいわば歴史的「母斑」としておびた特徴でもあった。スラヴ人へのキリスト教の布教のなかでは、9～10世紀にキリール文字が考案され、それをを用いて教典をスラヴ語に翻訳して、キエフのヤロスラヴ賢公の時代から、正教会は異教に対応し宣教をはたしてきた。14世紀のモスクワ時代には、ペルミ主教ステファンが北方コミ地方への布教のなかでコミの字母をつくり、経典を彼らの言葉に翻訳し、宣教にあたり、その方式は讃えられてきた。さらに、18世紀には、帝国に編入された極東のクリール諸島でも、アイヌの言葉を用いた正教と教育が試みられてもいた。アレウト諸島に司祭として赴任し、現地で先住民の言語や生活、慣習にも長じていたヴェニアミーノフは、19世紀半ばにシベリアとアラスカで布教し、やがてモスクワの府主教インノケンティとして知られることになる。西のローマ教会とは対照的に、ロシアの正教会はキリスト教の三言語主義（ヘブライ、ラテン、ギリシャ語）に拘束されず、宣教のなかで文字の考案と聖典の翻訳という歴史を経験してきたのである。そして、イリミンスキーも、またこのロシアの「母斑」を示しつつ、近代の国民「教育」の時代に、「母語」と文字の考案、教科書の作成をもって反応していたといえよう。

さて、この異族人教育の体系は、ヴォルガ地方のカザンから帝国の他の地域へも、シベリアからステップ（カザフ）、さらにはトルキスタンにもその適用が政策的に考慮された。これは、教育における「教授」言語の問題であり、初等尋常教育の普及という政策課題のなかでの「母語」の問題であるが、同時に、非ロシア系異族人のなかでの正教聖職者の育成と彼らの任用という、正教会組織の問題ともなっており、20世紀にはいると顕在化していく。

このような時代背景のなかで、この地域で生きた一人の教育者の姿も浮かびあがってくる。イリヤ・ウリヤーノフ（1831-1886）の家族である。彼の長男アレクサンドルは、1887年3月1日の皇帝暗殺未遂事件に関与し死刑となったが、父のイリヤは、この地域で視学監として活動していた。彼は、異民族の教育行政のなかで、1869年から文部省の官吏とし

て、1874 年から 86 年まではヴォルガ教育管区でシムビルスク県の尋常学校視学監を務めている。身分や資産、さらに信仰、民族などによる差別と排除が絡みあう初等教育において、母語による教育を進め、彼の任期に県内に 450 校が開校するが、その内 89 校がタタール、モルドヴァ、チュヴァシを学童とする非ロシア系民族の学校であった。1871 年には、県市シムビルスクにチュヴァシ学校が開校している。これは後に師範学校となり、チュヴァシの民族知識人の形成と文化の発展に大きな役割を果たす。チュヴァシは民族としてはチュルク系であるが、その多くが正教に改宗しており、その教育者で、この民族の「啓蒙」を担ったイリヤ・ヤコブレフとも、イリヤは家族ぐるみで深い親交を築いていた。視学監イリヤの長男アレクサンドルは処刑されたが、次男のヴラジーミル・イリイッチは、ロシア革命の指導者となるレーニンであり、レーニンが革命のなかでタタール＝バシキール問題をはじめアジア系の民族問題へも深い洞察をみせたことも、このような父をとりまく異族人の教育環境によっているのかもしれない。

ロシア革命のもう一人の指導者となるケレンスキーの父も、このヴォルガ中流地方、サラトフ県の視学官であるが、彼は帝国の辺境民族地域で「国家語」たるロシア語教育の実施に係わる人物であり、任地トルケスタンで国家勤務を終えている。1917 年のロシア革命の指導者として、レーニンもケレンスキーも互いに対立するが、その二人を輩出したこの地域と、教育と文化における「帝国」という環境も見逃すことはできない。

イリミンスキーの異族人教育体系、そしてウリヤーノフ家やケレンスキー家の人々の活動は、近代の「教育」の時代を背景としていた。それまでの貴族、その子弟のヨーロッパ遊学のグランツールや大学等での高等教育、さらに聖職者＝僧侶のための正教神学教育と、そこでの帝国知識人の形成から、19 世紀後半には初等教育を通じての「国民」教育が実現をめざす時代の始まりであり、そこでの人々の信仰と民族、その「母語」と文化が教育の場で緊張した関係を孕む時代へと展開していったのである。

第二節 ピウスツキの活動 ―革命運動と民族学研究

「大改革」の時代には、近代ロシアの革命運動の転機が訪れていた。ロシアでは、政変は基本的に皇位継承をめぐる局面で引き起こされてきたのであり、それは、18 世紀には幼帝と女帝を輩出した宮廷革命の時代に顕著であり、エカチェリーナ二世の「啓蒙」時代に至り、思想家のなかに初めて「革命」の理念が胚胎した。19 世紀に入るとデカブリストの乱にみられる貴族将校の運動が起き、クリミア戦後の 1860 年代からは、「大改革」に並行してナロードニキの運動が展開することになった。19 世紀後半からは、急進的知識人(革命的ナロードニキ)は、農民の窮状と資本主義の発展を批判し、「農民社会主義」の立場から農民革命による専制の打倒と社会改革の実現を目指した。ゲルツェンやチエルヌシシェフスキーをはじめ、バクーニン、ラヴロフ、トカチョフらの思想家と様々なグループの誕生と分裂が繰り返された。「土地と自由」、「黒い割り替え」、「人民の意志」などの結社が生まれ、

1873 年夏には、「土地」(農民)と「自由」(政治)を求め「人民のなかえ!」の運動が展開され、「狂った夏」とよばれた。

こうした状況のなかで、皇帝暗殺を企図した、いわゆるカラコーゾフ事件が 1866 年 4 月 4 日に起きたが、カラコーゾフはカザン大学の学生で、イリミンスキーの活動するこの地方は、この事件に揺り動かされた。さらに、1881 年 3 月 1 日には、人民の意志派により皇帝アレクサンドル二世が暗殺された。その後は、政治の「反動」と「人民の意志」党の組織解体が進むなかで、ナロードニキ運動には危機が訪れていた。そのなかで、1887 年 3 月 1 日の皇帝暗殺未遂事件が発覚した。この事件にはシムビルスク県の視学監ウリヤーノフの長男アレクサンドルが関与しており、ウリヤーノフ家をはじめ地方社会に衝撃が走った。

さて、21 才を迎えようとするブロニスラフ・ピウスツキ(1866 - 1918) も、1887 年 3 月に、この皇帝暗殺未遂事件に係わり逮捕された学生であった。4 月 18 日の法廷では、検事への反論は許されず、裁判長によって自己の弁明のみが認められた。彼は、この許された最終陳述で、「自分の革命理念への熱中はテロルへの熱中ではない」と、テロルへの同調は否定し、「私が自分の課題としたのは、若い時に働く人々の階級 **рабочий класс** のために活動するということである」と弁明した。ナロードニキ理念の継承を伝えたのである。被告 15 人全員に死刑判決がくだり、5 月 8 日にシュリッセルブルグ監獄で五人が処刑された。これは、事件の首謀者五人で、その内にアレクサンドル・ウリヤーノフもふくまれていた。他の十人は減刑された。ピウスツキは徒刑 20 年であったが、さらに減刑され、サハリンでの 15 年の徒刑とされた。1887 年 8 月初め、南ロシアの黒海の港町オデッサから蒸気船「義勇艦隊」で、彼はサハリンに徒刑囚として送られたのである。

彼の経歴を摘記すれば、次のようになる。

1866 年 11 月に帝国の西部、リトワニアのヴィリノ県にポーランド系貴族の長男として出生し、1877 年 9 月に、弟ユゼフと一緒にヴィルノ第一中学に入学している。彼の 1885 年の日記には、次のような記述がある。

「身のこなしの粹なこと、気晴らし.....とここで、僕にはこれら全てが重苦しい。無意味な何か粗野でもある無駄口をたたき、ただ何かおしゃべりし、女の子を笑わせるだけだろう。僕は、こんなことには疎い。自分のなかで自分を感じないのだ。歩むごとに、確信との矛盾に出くわす。僕はデモクラット、貴族たちの社会にいた。.....嘘と偽りの社会に堕ちこんだ。考える人間でありながら、陽気に騒ぐ洒落ものたちのなかにいた。この社会に満たされることはなく、その社交界を僕は避けた。」

零落する貴族の貧しい十九歳の青年が「デモクラット」(民主主義者)との自意識を秘めながら、貴族たちの社交に馴染めず、自分の場を見いだせず苦悩する一節である。

翌 1886 年の 6 月に首都のペテルブルグ第五中学に移り、そこを卒業し、彼は 8 月にはペテルブルグ大学の法学部に入学している。そして、12 月には「人民の意志」党の皇帝暗殺

計画に関与し始めている。翌年の3月には事件が摘発され、4月に被告15名に死刑判決がおりたのである。死刑の執行は免れたが、彼は減刑され8月にサハリン島へ流刑となった。まさに、人生の急変であった。1890年7月～10月には、作家チェーホフがサハリン島を訪れ、その来訪はサハリンの流刑囚のなかでも新聞を通して知られ、話題となるが、彼とピウスツキが会うことはなかった。チェーホフは政治囚の情報は得ていたが、彼らに会うことはなかったし、また先住民集落に入り調査することもなかった。流刑囚ピウスツキに決定的な運命を変える影響を与えたのは、もう一人の革命家であった。ピウスツキは、1891年1月に、流刑のユダヤ人、シュテルンベルグとサハリンで知り合ったのである。このユダヤ人は、「人民の意志」党の再建活動で摘発され、独房に3年間拘留されていた。準備した法廷での弁論も裁判もなく、行政措置で10年間の流刑とされ、1889年5月にサハリンに着いていた。ピウスツキはこのシュテルンベルグと知り合い、彼のギリヤーク(ニヴフ)の研究を補助するなかで、アイヌ研究に向かうことになったのである。

シュテルンベルグの残された日記のなかで、1890年7月2日の日付で始まる文面は、興味深い。ここで、彼はフランス革命101周年の日であると想起しながら書いている。ロシア暦の7月2日は、グレゴリウス暦で7月14日にあたり、バスチーユ監獄襲撃の日であり、フランス革命のパリ祭である。「我々、廃兵も、この偉大な日を控えめに祝った」と記しながら、流刑地の様々な出来事がこの日記で述べられていく。流刑地の浮浪やくざものたち、彼らへのギリヤークの対応、さらにはこの夏のチェーホフのサハリン訪問も話題にしている。そして、サハリンのトゥイモスク管区のルイコヴォ学校で、ピウスツキは彼のギリヤーク調査に同行している。これは、1891年のことと思われる。チェーホフの1890年夏の三ヶ月と二日のサハリン調査では、この島の先住民と政治囚は除外されており、この二人の流刑囚のギリヤーク調査とチェーホフは、交わることはなくニアミスにおわっている。

(Л.Я.Штернберг. *По Сахалину и Амур : Дневники путешествий, письма (1889 - 1927)*. Белгород, 2019.)

さて、1891年1月にシュテルンベルグと知り合い、ギリヤークの調査に立ち合ったが、ピウスツキがアイヌと初めて出会うことになったのは、1896年7月にコルサコフ(大泊)へ出張した際であった。翌年の3月に、彼は刑期満了となり、強制労働から流刑入植者の身分となり、1899年の3月に、サハリンを離れ、ウラジオストクに到着した。ここの博物館で働くようになり、1901年に、ギリヤークの少年インディンを招き寄せ、彼と協力して研究を進めた。1902年にはサハリンでの調査に赴き、1903年には、北海道でのアイヌ調査でポーランド人革命家セロフスキーにも同行している。1904年には、日露戦争のなかで一歳年下の弟ユゼフ・ピウスツキが来日し、彼は日本のポーランド支援に期待を寄せている。弟のユゼフも兄とともに革命運動に加わり連座していたが、彼は、第一次大戦後にロシアから独立したポーランドの初代大統領になっている。

極東でも1905年のロシア革命は展開し、流刑の政治囚たちも各地で積極的な行動にでていた。兄のピウスツキは1905年10月に神戸を訪れ、ロシア軍捕虜のなかで活動するニコ

ライ・ラッセルの宣伝活動を手伝うこともあった。翌年 1 月には、東京で二葉亭四迷と会っており、彼の日本人との交流は、澤田和彦氏の研究によれば百人以上に及んでいる。彼が論文「樺太アイヌの状態」発表するのは、この時期である。革命の波が過ぎると、1907 年には、愛人マリアとともにポーランド南部のクラクフなどに寄留している。1912 年には、彼の主著となる「アイヌの言語とフォークロア研究資料」(英文)が発表され、彼はアイヌ研究者として知られることになったのである。

第一次大戦の前夜、1914 年 6 月には、彼は、ブリュッセルで日本の社会主義者石川三十四郎と再会している。大戦がはじまると、1916 年に中立国のスイスに戦火を逃れ、1917 年にロシア革命で帝政が崩壊すると、ポーランド独立のために協力するが、1918 年の 5 月 17 日に、パリのセヌ川に投身自殺した。(以上、ピウスキに関しては、沢田和彦氏の最新の研究によっている)

【サハリンでの生活と活動】

ピウスツキに関しては、日本では専らアイヌ研究の関りから注目され、研究が進められてきた。しかし、アイヌ研究に限定されない、ロシアのシベリア・極東、アラスカに及ぶ先住民社会との関わりから捉え考えることができよう。ピウスツキがサハリンから大陸にかけて少数民族ギリヤーク(現ニヴフ)とアイヌへ関心を向け、ニヴフの少年インディンへ期待し、彼をウラジオストクへ招いたことは、ロシアが啓蒙「教化」のため、シベリアからアラスカにかけ先住民、とりわけその児童のロシアへの適応馴化を促す対応の範囲内でもあった。また樺太アイヌの首長の娘チョフサンマとの結婚には、その地の先住民からの安全のため、現地首長の一族とりわけ娘を娶り、先住民社会との親交をはかるという慣行もあったことも、忘れてはならない。ここでは、北方の少数民族に対するロシアの支配の形態と慣行、そこでのピウスツキの調査活動が交錯する世界がひろがっていたともいえるであろう。サハリンでの彼のアイヌ研究と活動を、さらに考えてみたい。

ルイコヴォ集落でニヴフの子供たちとピウスキ



1902 年に 7 月に、彼はウラジオストクからサハリン島に向かい、サハリン島で調査をしている。当時のサハリン島は、人口 2 万 8,113 人の内、先住民はオロッコ(現ウイльта) 788 人、ギリヤーク(現ニヴフ) 1,977 人、アイヌ 1,434 人、計 4,199 人で、サハリン全人口の 15.2%であった。ちなみに、この 1897 年の人口調査に基づく統計では、428 人の日本人

も確認されている。ピウスキは 1903 年 9 月には、知事リャプノーフの依頼をうけ、1904 年に「サハリン先住民統治草案」を策定している。ここでは先住民に対し勸農と畜産を奨励しながら、彼らの集落への「自治」の導入が構想されていた。彼ら先住民の集落には、郷から選出された首長 *старшина* を置き、さらに異族人に関心を持つ学者から特命の異族人長を任命し配置するとしていた。その他に、この「草案」では、アイヌの兵役免除と、商人たちの詐取から守るためアルコール販売の禁止を求め、学校教育を重視していた。

サハリンでの調査と「先住民統治草案」の策定と同時に、ピウスツキは識字学校の開設と教育の実践に乗り出している。1902 年 11 月から翌年にかけて、アイヌ集落でその実践にあたっている。だが、1903 年にはインディンで死去で失い、彼を「自然の継子」と嘆きつつ、ポーランド人のセロフスキーに同伴して、7 月には北海道にアイヌ調査に赴いている。10 月にはサハリンのコルサコフに帰り、首長の娘チョフサンマと結婚している。12 月にナイブチに寄宿学校を開校し、ここを故郷とする千徳太郎治を教師としている。千徳は母を樺太アイヌとして生まれ、樺太アイヌの対雁への移住で石狩に来住していたが、1895 年(明治 28)には多くの仲間と墓参を名目に樺太に戻っていたのである。こうして、1902 年から 4 年にかけて、冬季間に限られていたが、彼は巡回の学校をひらき、アイヌへの教育が試みられたのである。ここでは、識字と「母語」の関係が問題となるが、三つの原則でアイヌへの教育はなされた。一つは、児童を両親から引き離さないということである、第二に、職業教育の重視であり、第三にアイヌとロシア人の共学、男女の共学であった。しかし、識字では母語にもとづく教育は補助にとどまった。アイヌ学校の教師を務めた千徳太郎治には、キリール文字を習得させている。千徳は、1906 年にキリール文字によるアイヌ語で、三通の手紙をピウスツキに宛て、支援を求めることになる。ピウスツキの先住民に対するこのような「自治」の構想と「教育」の実践試行は、やがて始まる日露戦争と日本によるサハリン占領と統治のなかで「未発」の可能性として閉じられたといえよう。

さて、ピウスツキのニヴフとアイヌに関する調査研究へは、すでに同時代の極東で優れた批評がなされていたことも忘れてはならない。『ヴラジオストク』誌は、1899 年 8 月 1 日号でソヴレメンニク氏による、ピウスツキの活動に関する評価を載せている。

ヴラジオストクは、1860 年の 6 月にロシア軍の常駐の哨署が築かれ、極東の自由貿易港として発展を遂げていたが、ここで週刊誌『ヴラジストク』が発刊されたのは 1883 年で、翌年にはアムール地方調査研究協会が形成され、協会に付属する博物館も開設されていた。同誌には民族学研究の記事や目録も掲載されており、ピウスツキのギリヤークとアイヌに関する研究への優れた書評も、この地方誌に載ったのである。同誌の 1899 年 8 月 1 日(第 31 号)に、ソヴレメンニク氏が「短評 サハリン 6 月 10 日」の文章を寄せている。筆名ソヴレメンニクは「同時代人」を意味するが、この書評子は、この「短評」で、まずシベリアとサハリンで外来者や流刑者がもたらす森林破壊を厳しく指摘し、サハリン島の住民にもたらしたその影響と運命に警告を発する。そして、オムレフスキーなる人物の次の五行詩を紹介するのである。

おまえは、未開の人々より何をもって優れているのか、開かれた族よ？	Ты чем его выше, развитое племя ?
おまえは、彼らを何をもって高めたのか、人道の世紀よ？	Ты чем его поднял, гуманности век ?
我々の自惚れ強い高慢の時代に、	Не тем ли, что в наше кичливое время
至る所でおまえの重荷を負って滅びつつある	Везде вымирает, неся твоё бремя
おまえによって墮とされた未開の人によってではないか？	Тобой развращенный дикарь-человек ?

同時代人は、オムレフスキーの文明批評のこの五行詩を紹介しつつ、ピウスツキの論文を批評する。「ピウスツキ氏の論文を読み、ただ良い側面にのみ注意を払い、未開人に固有のエゴイズムや冷淡さの褒められない多くの側面を見過ごしている、彼の全ての人格に対する愛と尊敬の感情に....驚かざるを得ない。著者の魂のこれらの善良な性格は、教育に、すなわち自らが優れた文化的種族に属しているということに負っていると、我々は考えている。」

同時代人は「未開人」の「ただ良い側面」だけをみているピウスツキの「善良な性格」に感嘆しつつも、バイカル湖の「白鱈 オームリ」に仮託したシベリア作家オムレフスキーのこの詩を紹介しつつ、自然の破壊と少数民族の運命に警鐘を鳴らしたのである。

このソヴレンニクなる人物が誰であるかは、残念ながら特定できない。だがオムレフスキーは、本名フォードル、インノケンティ・ヴァシリエヴィチ(1836-1883)である。極東カムチャッカのペトロパブロフスクで生まれ、イルクーツクと首都のサンクトペテルブルグで活動した「シベリア作家」である。彼は、1860年代にシベリア主義者のポターニンやヤドリントツェフとも交流し、60年代の改革という「時の風」を小品や詩のなかに表現していた。革命後の1920年代に「シベリア作家」のための資料集を上梓したズドブノフは、「シベリア作家」というカテゴリーの核にシベリアで生まれ、あるいは来住し定住した作家たちを位置づけたが、その筆頭に彼は挙げられていた。この「シベリア作家」のカテゴリーにはドストエフスキーの『死の家の記録』やチェーホフの『サハリン島』も含まれ、彼ら作家の作品はつとに知られているのであるが、オムレフスキーは忘れられ、彼の作品は政治の主張を性急に反映させた「政綱文学」と評され揶揄されてきたのである。しかし、シベリア地域主義と響き合う文学として、彼は見逃せないであろう。

*** Н.В.Здобнов. Материалы для сибирского словаря писателей (предварительный список поэтов, беллетристов, драматургов и критиков. М.,1927)**

ソヴレメンニク氏の「人道の世紀」の恩恵に浴し、そこから先住民を扱うピウスツキの「善良な性格」への指摘であるが、ピウスツキは、自身も開発による生態系の破壊に危惧を懷いていたということも、忘れてはならないだろう。ある書簡のなかで、彼はサハリン島での利権供与による油田開発が、河口と近くの海岸を広く汚染させ、魚類を枯渇、消滅させ、ロシア人にも原住民にも破滅的な結果をもたらしかねないと警告していたのである。

ピウスツキのサハリンでの民族学研究と少数民族への教育などの活動は、帝国の流刑囚の行動と交錯する世界で繰り広げられた。シュテルンベルグ、ユヴァチョフといった革命家にして流刑囚のシベリア・サハリンでの生活と活動と、ピウスツキは交錯し連動し息づいていたのである。

サハリン流刑のシュテルンベルグ 1894 年



さて、ピウスツキのアイヌ研究を中央で支援した人物として、シュテルンベルグにも言及しなければならない。シュテルンベルグ、レフ・ヤコヴレヴィチ（1861-1927）は、ウクライナのジトミールのユダヤ人家族に生まれ、ペテルブルグ大学の物理数学部に入学している。人民の意志党の再建に取り組んだが、1886 年 4 月に逮捕され、10 年間のサハリン流刑の判決を受け、彼がサハリンのアレクサンドロフスク哨所に到着したのは、89 年 5 月 19 日である。彼は、ギリヤーク（ニヴフ）の生活と言語の研究に入り、ピウスツキとの初めての出会いは、1891 年初め冬 1 月のことであった。イヴァン・パヴロロヴィチ・ユヴァチョフ(1860-1936)は、人民の意志

党の軍事組織のメンバーとして、1883 年に逮捕され、死刑判決から 15 年の徒刑に減刑され、1895 年までサハリンへ流刑となっていた。彼らが、ロシアの民族学研究の一潮流をなしたのである。革命家が流刑囚となり、その送られた辺境の異域で先住民の生活慣習と言語の研究を進めたのである。そこにはユダヤ系やポーランド系の人々が多く含まれていたのである。

ロシア民族学の研究において、この革命家＝流刑者によるものとならんで、正教の宣教師イリミンスキーの系譜での研究も大きな広がりをもっている。中央からピウスツキの活動を支援したのは、アカデミー会員書記となったシュテルンベルグとともに、科学アカデミー会員で東アジア研究を担当していたラードロフであった。ピウスツキはその支援を受け、日本のサハリン占領の 1905 年 7 月まで 3 年間にわたり、南サハリンでの調査資金を得ていた。このヴァシリー・ヴァシリーエヴィチ・ラードロフ(1837-1918) は、イリミンスキーのシステムのもとで、ヴォルガ＝ウラル地域を管轄するカザン学区でチュルク系諸族のタタール、バシキール、キルギス(現カザフ)学校の視学監として、1872 年から 84 年まで、十年余を教育と研究に従事していた。その後、チュルク系民族やユーラシアの調査研究を進め、首都サンクトペテルブルグの科学アカデミーを中心に、帝政ロシアでチュルク＝モンゴル研究の基礎を作り出していた。

そして、第三に、帝国の軍人と官僚、たとえばプルジェヴァリスキーによる極東や中央アジアの探検調査や、20 世紀に入ると、アルセニエフの極東での先住民の調査研究がある。

これらが帝国への様々な異域の人々の支配統合へ向けた「知」の体系を形成したのであ

る。これらの潮流に代表される民族学の「知」の体系は、1917年の革命後には帝国の「文明」と正教への統合から脱却して、ソヴィエト民族学の発展のなかに継承されていく。シュテルンベルグは、1886年に逮捕され、オデッサの監獄で、すでにエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を読み、先住民社会を人類の発展の段階に位置づけようとし、原始共産制の遺物をさぐり、「文明」と「進歩」の図式と階梯から発達の遅れた社会へ眼差しをむけていた。そして、彼は現実の民族問題へも鋭い分析を行っていた。1910年に首都で出版された『現代国家、オーストリ・ハンガリー、ロシア、ドイツにおける民族運動の諸形態』（コスチュリャンスキー編）では、彼がロシアの「異族人 概観」と「ブリヤート人」を分担執筆していた。また、イリミンスキーは正教への内面からの「回心」を求め、異族人の母語と文字の創出をめざす「教育」が展開していた。彼の死後、イリミンスキーの正教教育システムは、異民族の教育においてロシア語の優位を主張する勢力から反発されながら、20世紀には大きく発展していった。1917年の革命後は、ソヴィエト政権の下で宗教を脱色し、母語とそれに基づく文語の形成、そして教育はソヴィエト民族政策の要ともなっていく。この両者はともに「文明」に依拠した「進歩主義者 **progressist**」でもあり、革命後のソヴィエト民族学のなかに継承され、極東では、アルセニエフを中心とした民族学アムール派の「愛国主義」^{パトリオティズム}とともに生きていくといえよう。

第三節 「希望の言語」の創成をめざして

ヴォルガ中流域でのイリメンスキー、極東・サハリンでのピウスツキの活動と並行して、帝国の西部では、一人のユダヤ人眼科医の新しい言語の創造を目指す活動があった。彼、リュードヴィヒ・ラザル・ザメンホフ（1859-1917）は、1859年12月にグロドノ県のベロストーク市のユダヤ人家族に生まれている。ここは、ピウスツキの故郷ヴィリノ県から南西のリトワ地方である。父はドイツ語の教師で検閲官でもあり、家庭ではポーランド語が、周囲のユダヤ人のなかではイディッシュ語が話され、学校ではロシア語で授業が行われ、これら四つの言語が競合し、そこに支配と差別、蔑視が交錯しあう社会であった。当時、グロドノ県全体で、ロシア人は白ロシア人を含め54%であった。ユダヤ人は、この地方に居住を許された17世紀の前半から増大し、県人口の19%を占めるに至っている。かつてこの地方を支配したポーランド人は20%であった。ドイツ人はプロイセンからベロストークに移住した商工業の担い手が多く、ベロストークはこの地方の工業発展の中心となっていた。

このような民族・信仰・文化の交錯する帝国の西部で育つが、ザメンホフの家族は1873年にワルシャワへ移住し、翌年の8月に、本人のリュードヴィヒは、ワルシャワの第二男子ギムナジウムに入学した。このような環境で、彼は、すでに1878年の12月17日に、“Lingwe universele（普遍言語）”の実質的な完成を、ギムナジウムの同僚と祝っている。

この 19 才のときに、彼はモスクワへ出て医学を学び、やがて戻り、ワルシャワ大学を 1885

ザメンホフの写真

Людвик Лазарь Заменгоф

לייזער לוי זאמענהאָף



年に卒業すると、眼科医としてスヴァルキ郡のユダヤ人集落で開業している。スヴァルキ市は、ポーランド北東部でリトワに接し、人口は後の 1899 年の時点で 27,165 人、その内、ユダヤ人が 53%と過半をなし、ついでポーランド人が 38%である。彼は、眼科医としてここで働きながらギムナジウム以来関心のあった普遍的な共通言語の研究を進め、1888 年にロシア語で一冊の本を出版した。エスペラント博士の『国際語』(Д-р.Эсперанто. *Муждународный Язык.*)と題された 40 ページの小冊子で、この本は ポーランド語、仏、独語にも翻訳された。二年後の 1889 年の住所録 «Adresaro」、つまり、エスペラント話者の名と宛先を記載した冊子には、すでに 919 人が帝政ロシアの各地に、つまり、首都ペテルブルグ 85 人、ワルシャワ 78 人、オデッサ、キエフ、モスクワ、ヴィリノなどの都市で記載され

ていた。ついで、ドイツでも 30 人の多くの話者が記載されていた。

ザメンホフはロシア帝国西部のグロドノとワルシャワに留まり、この「希望」を意味するエスペラント語の普及と新しい思想運動を目指した。その思想とは、“Homaranismo (гомаранизм)”とよばれ、これは「人類人主義」とも訳せるが、個々の「人間 homaro」が民族や国家への帰属を越え「人類 homaro」を構成するという思想であった。

彼の主張は、ヨーロッパ各地に支持者を見出し、と同時にその反発も呼び起こし、危険視もされた。1902 年から大戦前夜の 1914 年まで、エスペランチストの世界大会が 10 回にわたり開かれた。帝政ロシアのユダヤ青年の夢は、この《エスペラント *esperanto*》に文字通り、夢と希望を込め、国家と民族を越え、支配と対立、差別と無縁な新しい「中立的」で普遍的な共通言語を求める運動として展開したのである。この「中立的」な普遍性を目指す運動は、しかしながら、いくつかの次元で対立と反発、警戒を呼び起こすものであった。

まず、東欧ユダヤ人のなかでドイツ語の影響を受け形成されたイディッシュ語、つまり、彼らの母語との関係である。このイディッシュ語に文字をあたえ、ユダヤ人プロレタリアートの言語として形成する運動が、ロシアやポーランドのユダヤ人社会主義者のなかで進められていた。もう一つは、ユダヤ人の居住するそれぞれの国で、その国家を担う民族（国民）との市民的同権を求めつつ、ユダヤ人がその国家の言語に同化していく「自発的同化」の動きである。これは、フランス革命後のヨーロッパ諸国でユダヤ人の「解放」を目指すなかで追求された一つの道であった。そして、第三はシオニズムであり、これは、1896 年にシナイ半島のシオンの丘への帰郷と国家建設を目指す運動として始まり、ここでは古来のヘブライ語の復興が目指されたのである。このようなロシア・東欧のユダヤ人の置かれ

た歴史的状況のなかで、ザメンホフのエスペラント運動が生まれ、国境と民族を越えて共感するエスペランチストを生んでいったのである。エスペラント語が目指す運動は、それぞれの国家とその「国家語」のもとで差別され同化を強いられる方向に対して、「国家」と民族を超えるユダヤ人の解放への志向を示すものであった。東欧では、ユダヤ人の言語との関係でいえば、それぞれの地域が独立し、その地域の民族が「国家語」を形成することに対し、ユダヤ人の言語は支配民族にとってのみならず、新たな民族と国家語の創成を求める人々にとっても危険な言語であった。

19 世紀末の帝政ロシアには、当時の世界のほぼ半数、約 500 万人のユダヤ人が居住し、ロシアは世界最多のユダヤ人口を抱える帝国であった。彼らは、帝国の西部地域に居住が制限され、そこを離れて生活するには規制がなされ、身分としては帝国の「異族人」として職業と経済活動、教育の分野で差別されていた。エスペラント運動では、言語の「中立性」を求めるあまり、その継承者であるザメンホフの娘リヂヤにみられるように、積極主義の傾向も生まれた。これは、民族語を使わず、最初からエスペラントのみで教えるとの主張であり、国家語のみならず、民族語の再生と復権をもとめる民族運動とも対立する局面を孕んでいた。

ロシア革命後のウクライナでは、民族の解放と民族文化の形成が求められるなかで、大ロシア主義への批判のみならずエスペラントへの反発も生じた。ウクライナで革命を指導し、ウクライナ共和国で教育人民委員として活躍した人物にスクルィプニク N.A. (1872-1933) がいる。彼は、革命後のウクライナでソヴィエト権力の「民族化」、つまりウクライナ化を担い、1920 年代にウクライナ語の正書法を改革し、ウクライナの民族とその国制、および文化の分野で尽くした人物として知られる。彼がウクライナ共産党の理論誌『コムニスト』(1930 年 6 月) に発表した論説「エスペラント化か、ウクライナ化か」は、興味深い。彼は、「個々の民族が独自の文化を建設しようとする事」に対し、エスペラントは「脱民族文化をめざし」ており「反動的で偽物である」と批判したのである。ここでのエスペラント批判には、ロシア中央への統合を強める「大ロシア主義」への警告が隠されていると読めるが、やはりエスペラントの民族と国家を超える志向への、「ウクライナ化」を求める革命家からの危惧と違和感であろう。

19 世紀半ばから 20 世紀にかけて、帝国の官僚と軍人が用いる統治の言語、裁判と司法の言語であり、そして教育の場での教授言語としての「国家語」に対して*、生活と社会のなかで人々が語る「母語」が主張され、他方で民族や国家を超える「中立的」で普遍的な言語を創造する運動が生まれる状況であった。日本でも、帝政ロシアで生まれたエスペラント運動は、すでに 1906 年に、ロシアから二葉亭四迷によって紹介された。四迷がこの年に上梓したエスペラントの入門書『世界語』は、扉のページに「日本におけるエスペラント運動の父」としてフョードル・ポストニコフ(1872-1952)の肖像を掲げていた。ポストニコフは、ウラジオストクのエスペラント運動の指導者で、二葉亭は、彼に学んでいたのである。

第一次大戦以降は、その影響はさらに広く及んだ。新渡戸稲造や柳田国男が国際連盟の場で国際語としての採用に動き、「一犯一語」と豪語した革命家の大杉栄もエスペラント運動に共鳴し、ロシアから来日した盲目の詩人、ワシリイ・エロシェンコもエスペランチストであり、多くの文化人と交流したのである。

* 帝政ロシアでは、1906年の帝国憲法で、その第3条に初めてロシア語が「全ロシアの国家語」と明記され、全ての国家・社会機関、陸海軍での使用が義務とされた。それまでは、ポーランド語やウクライナ語など非ロシア系の個々の言語に対し、行政的制限を課し、帝国での使用と機能へ規制がなされ、出版物では検閲がなされていた。

結びにかえて

明治維新以降の日本でも、近代国家を担う「国民」とその言語として「国語」を形成するうえで、ロシアの状況は反響していた。帝政ロシアと日本の近代における共振は、社会と文化の幾つかの面に窺うことができる。ナロードニキ運動は、明治の自由民権運動のなかにも反響し、日本の新聞にロシアの「虚無党」へ初めて言及されるのは、明治11(1878)年であった。

また、宣教者ニコライは、1861年に25歳で函館に領事館付き司祭として赴任し、やがて東京、神田の御茶ノ水の大聖堂を拠点にして日本で宣教活動を展開し、日本の文化にも確かな足跡を残している。このニコライ・カサトキンは、二度祖国ロシアに帰還している。1869年から翌年にかけての帰国では、日本宣教師団の設立が認められ、祖国からの支援を確保している。その十年後の1879年から翌年秋まで、彼は二回目の帰国を果たすが、彼はロシアで様々な人物との交流を深めている。ロシア政府および宗教界において枢要な地位にあるポベドノスツェフをはじめ、文豪のドストエフスキー、さらにイリミンスキーらカザンの異族人への宣教者たちである。

モスクワでは、1880年の6月1日、日曜日にドストエフスキーに会い、ニヒリストについて意見を交わすが、この文豪は、ニコライに「黄色人」としての日本人のもとで宣教にどんな特徴があるのかと質問していた。そして6日のプーシキン記念碑の除幕式に参列して、ニコライはロシアの文化の息遣いに触れ、8日の日曜日にはカザンに向けて立った。10日にカザンに着き、16日にそこを離れるまで、ニコライはもう一人のニコライ、つまりイリミンスキーと心を打ち明け歓談する日々を送ったのである。彼の日記では、10日には一日中、イリミンスキーと話し、12日には受洗タタールの司祭、チモフェーエフに歓迎され、楽しく過ごしたとある。15日の日曜日には、ニコライはカザンの大聖堂での聖体礼儀に列席し、当地の正教宣教者たちと歓談し、この地の宣教団がその理念を深く理解していることに感興を覚えている。日本のニコライは、カザンのニコライと語らい、お互いに異域の民族のなかでの宣教の理念に共感し励まされたのであろう。日記には次のように書き留められている。「まことに心を動かすのは、彼ら全ての人々が宣教の使命 Миссия に係わって

いることである。宣教の理念は、カザンでは親しく愛しいものなのだ。」（中村健之介 編訳『ニコライの日記 ロシア宣教師が生きた明治日本』上、岩波文庫、2011年：Дневник святого Николая Японского. Т.1, СПб, 2004, С.293-301.）二度目の帰国で、日本のニコライは、カザンでイリミンスキーらと6月の初夏の一週を、宣教で共感し語らい合ったのである。1912年にニコライ逝去の知らせを日本から受け、カザンの正教会は逸早く弔辞を寄せたのである。イリミンスキーのロシアでの正教教育とニコライ・カサトキンの日本での宣教は、この二人のニコライのあいだで互いに響き合っていたのである。

これらの政治や宗教の分野に限らず、さらに、ロシア文学の二葉亭を介しての日本の文学への影響はいうまでもない。大正期にはエスペラントの影響も日本の知識層に広く及んだ。そして、文学から近代日本の「国語」の形成においても、ロシアの反響は窺い得るのである。

すでに、明治の近代化は、英仏独の西欧に「国家」の範を求め、ロシアへの関心が後景に退いていたのは、『米欧回覧実記』から窺えたのであるが、明治の新しい「国民」とその言語の形成は、知識人にとっても大きな関心事であった。福沢諭吉が、漢語の多い難解な文語から容易な日本語を求めているのも知られているが、明治五年、西暦1872年に、日本の公用語として英語の採用を主張したのは、後に伊藤内閣で初代文部大臣に就く若き森有礼である。西 周も『明六雑誌』において「洋字をもって国語を書するの論」をたて、次のように述べていた。

「それわが国の文字、先生はじめこれを漢土に取りてこれを用う。かの時、文献またことごとく漢土にとる。今ひとたび世運に逢うて文献すでに欧州にとる。すなわち、何ぞひとり文字を取らざるの説あらんや」「あるいは曰く、かれの文字を用いる、もとより可なり、ついに英語もしくは仏語を用いしむるにしかず。昔魯国の官府ことごとく仏語を用う、今すなわちやや自国の語を用う、この例による、また不可とせずと、僕おもうにしからず。」

西周は、英仏語を用いつつ、ロシアのように「自国の語」に到る道もあると、ロシアの事例を挙げながら、「洋字をもって和語を書し呼法（発音）を立てをもってこれを読む、かくのごとくのみ」と主張し、この文字改革は「施行上、漸の一時」で行うことへの配慮をしめしていた。明治以降、日本語をヨーロッパの文字（アルファベット）で表記し、日本語の創成を目指す動きは底流として存続したのである。1875年（明治8）に大槻文彦は文部省から国語辞典の編纂を命じられ、十年を経て1886年（明治19）に『言海』が成立した。その後、校正をへて1889年から91年にかけて刊行されるが、これは、国家が言語を規制統一し「国家語」の形成をめざすという欧米諸国の趨勢のなかに日本もあつたことを示している。1891年6月23日の『言海』の完成祝賀会に寄せた伊藤博文の祝辞は、日本の文字と言葉の多様性のなかでの国語への統一を讃えるものであつた。さらに1894年（明治27）に、上田万年は、「国語と国家」で「国語は帝室の藩屏なり、国語は国民の慈母なり」と述べるが、ここには「国語」が「帝室の藩屏」にして「国家語」たる性格を強める意気がこめら

れていた。さらに、1900 年(明治 33)の「内地雑居後における語学問題」では、彼は「我日本帝国の国民は聊も国語上の準備なくして内地雑居の暁にまで至りたり」と危惧し、「声音字」の採用を迫り、「而して此声音字は露西亜が露西亜国字を一定したるが如く、日本語の為に、日本人のために、日本人の作りたる声音字たるべし」と主張し、ロシアの文字改革が参照に挙げられたのである。ここでは、ピョートル大帝が、それまでの字母と教会中心の文芸に対して、ラテン文字に倣い音に合わせてキリール文字の改革を断行し、世俗的な公用文字を採用したことが考慮されている。幕末から明治にかけて蘭学のなかに展開したロシア学、そこでは英帝ピョートルとその改革、国勢の興隆は、文字改革を含め、明治日本の「国語」形成においても、その知見は引き合いに出され、参照されていたのである。

さて、小学校令により教育科目に「国語」が初めて登場したのは、1900 年(明治 33)で、従来の「読書」「作文」「習字」の教科を一括し「国語」科目として成立したといわれる。ここで“漢字仮名交じり文”から“普通文”が定着する道が開かれた。漢文ないし漢文読み下しの文語から、口語による国文へと転換し、普通文、つまり標準語として発展していくのである。この過程で、大槻文彦の口語法に依拠して、文部省は大正 5 年(1916)に「口語法」で、東京の教養の高い人々の話し言葉を基準とすることを方針とした。こうして、口語での地方の「訛り」(訛音)の矯正と東京の中流社会を基準とする標準化も進められた。そのために方言札など矯正手段が学校現場でとられたのである。維新以来、英(仏)語の採用論や 仮名(ローマ字)専用論も唱えられ、文字と仮名遣い、標準語の形成が論じられてきたのだが、そこでは、ロシアの文字改革とともに明治二十年代の言文一致運動、そこでの二葉亭のロシア文学からの影響も、探ることができるであろう。

このような複合的な状況を経て、日本では「国家語」としての「国語」が、新聞・雑誌など言論ジャーナリズムの急速な発展と教育の普及を介して成立し、確立していった。明治の 1890 年代から大正にかけての、この近代日本の「国語」形成過程において、しかし、「方言」とともに「母語」は逸失していき、権利としての「母語」が唱えられることもなかった。「国家語」と「母語」の明確な対照が意識されることなく、^{ゆえ}鶴的な「母国語」という表現も生まれ流通したのである。

日本は、1889 年に帝国憲法と皇室典範を發布し、翌年の議会開催と教育勅語をへて、「帝国」とその核心としての天皇制が形成された。その体制のもとで、アイヌの教育に関しては、1899 年に「北海道旧土人保護法」が制定され、その第九条は「旧土人の部落を為したところには、国庫の費用で小学校を設けることを得」と述べ、そのために「旧土人児童教育規定」(1901 年)が施行された。教育は日本語で行われ、その「母語」は否認され、先住民アイヌには簡易な実物教育がなされた。「母語」教育は未成立であった。他方、1879 年(明治 12 年)の琉球処分で設置された沖縄県では、そこでの教育は、言語と習俗の日本への同化を強く迫るものであった。

さらに、帝国の「外地」とされた地域でも、内国植民地と化した北海道での先住民アイヌと異なるところはなかった。日本の支配下に編入された台湾、朝鮮、満州、南洋植民地

での教育における「日本語」の位置は、1901年の『台湾教育会雑誌』（創刊号）から窺い知れる。ここでの会長、石塚英蔵の言葉は明瞭である。彼は「優等人種は劣等人種を己に同化せしむること必要なるを感ずるの理由も、亦明白ならん」、「いずれの植民地においても同化を以て統治の最終目的とせざるはなし」と断言する。そして、「同化の最大要素は言語にある」のは「自明」とし、「永遠の目的は土人をして本国人の方に接近同化せしむるにあるを要す」と言明する。ここで、台湾教育会長の石塚は、欧米列国とともに「侵略併合を主張する露国の如き殖民政策」にも注意を促し、「所謂国語の生存競争」で、第一にロシアを挙げ「自国語の拡張、他国語の圧倒に付いて極端の手段を執る者を露国とす」と指摘する。ここでは、露国の殖民政策とその「自国語」の政策に対比して、日本の植民地支配と、そこでの「土人」の「同化」を強く訴えかけているのである。帝政ロシアで展開した多様な言語と文化への取り組みではなく、国家語としてのロシア語、そのおよぼす脅威と「同化」が強調され、「所謂国語の生存競争」が訴えられるのである。

ロシアで展開した帝国の言語と文化、そして統合をめぐる多様な動きは、帝政ロシアの民族問題のなかで全体的に把握されるものであるが、それは近代日本にも、ピョートルの文字改革、二葉亭の文学、そして帝国ロシアの言語政策など、多面的に反響しているのである。

参考文献

- ・) 沢田和彦『ブロニスワフ・ピウスツキ伝 <アイヌ王>と呼ばれたポーランド人』成文社、2019年。
- ・) 西山克典『ロシア革命と東方辺境地域 「帝国」秩序からの自立をもとめて』北大図書刊行会 2002年。
- ・) ヴラディスラフ・ラートウイショフ（西山訳）「ブロニスワフ・ピウスツキ・サハリンにおける経歴と活動・」『ロシア革命史研究資料』第2号（1992年10月）。
- ・) ウルリヒ・リンス著（栗栖 継訳）『危険な言語 - 迫害のなかのエスペラント-』岩波新書、1975年。
- ・) 田中克彦『エスペラント・異端の言語』岩波新書、2007年6月。
- ・) 小川正人『近代アイヌ教育制度史研究』1997年、北大図書刊行会。
- ・) 中村健之介 編訳『ニコライの日記 ロシア宣教師が生きた明治日本』上、岩波文庫、2011年（原典 *Дневник святого Николая Японского*. Т.1, СПб, 2004）
- ・) 岩手県一関の市立博物館には、幕末から明治にかけて活躍した大槻家の玄沢、盤溪、文彦と三代にわたる、蘭学に始まる学問の成果が展示されている。博物館には、大槻文彦の『言海』の成立に寄せた伊藤博文の祝辞も示されている。